

富山大学産科婦人科学教室は専門ごとに分野を分け、それぞれが独自の研究を行い、特に周産期医療と不育症の分野では最先端の成果を挙げている。同教室の教授である齋藤滋先生は、附属病院の病院長として、患者さんへの研究成果の還元も重視している。また齋藤滋先生は、H1N1 パンデミックの起こった2009年に、日本産科婦人科学会内に設立された対策チームの委員長として、妊婦死亡ゼロの目標に向けて尽力された。当時のパンデミックへの対策を含め、妊婦のインフルエンザ対策を中心に幅広くお話を伺った。



齋藤 滋

富山大学附属病院病院長 / 富山大学  
副学長 / 同 大学院医学薬学研究部  
産科婦人科学教授

## 妊婦のインフルエンザ対策

特に妊娠後期ではインフルエンザに  
起因する肺炎が重篤化しやすくなる

——教室の沿革と概要について、簡単にご紹介ください。

**齋藤** 1975年に、医学部と薬学部の2学部で構成される全国唯一の大学として、富山医科薬科大学が開校しました。2005年には富山大学、高岡短期大学と合併して新しい富山大学が誕生し、現在に至っています。

附属病院の産科婦人科は、1979年から診療を開始しています。産科婦人科学教室には現在20人のスタッフが在籍し、「周産期学」、がん診療を行う「婦人科腫瘍学」、不妊治療や子宮内膜症などを扱う「生殖分泌学」、そして更年期などの「女性医学」の4つの分野に分かれて、それぞれテーマをもって研究に当たっています。教室の方針としては、あくまで患者さんの治療を最優先に考えながら、臨床研究で得られた知見を患者さん中心の医療に還元できるよう努めています。

——妊婦のインフルエンザ感染における重症化のリスクについてご解説ください。

**齋藤** 妊娠すると、胎児を拒絶してしまわないようNK

活性が抑えられるため、ウイルスに対する感染防御力も落ちてしまいます。このためインフルエンザにも感染しやすくなり、感染してもウイルスを排除しにくいため、重症化しやすくなります。

また妊娠後期では、子宮が大きくなって横隔膜が挙上するので、肺の容積が小さくなります。さらに、妊娠によって循環血漿量は1.5倍になり、大きな循環負担もかかります。これらの因子も、インフルエンザの感染から



施設外観